

パイプラインのパイプ破壊研究, ガス輸送用パイプラインの破壊力学的設計概念, 専門家の報告がない場合の問題, 使用中の球形タンク溶接割れなどの報告があつた。

セッション: 溶接の自動化及び機械化

ロボット, 制御技術の発展により, 溶接の自動化は世界のいずこでも進展している。このセッションでもアーク溶接の自動化について報告が多くなされた。パルス溶接におけるビード形状と溶接条件の関係, コンピューター制御された TIG 溶接電源, 小物連続生産のためのアークロボットと治具の運動をプログラム化した

FMS, 最新のアーク溶接のプロセス制御, 角変形量の計算プログラム, 点溶接のコンピューターによるモニターリング, 短絡移行現象のコンピューターによる分析法などがある。会議が終わると参加者はいずれも家路を急いだ。クリスマスという大きな家庭行事が待っているために。

最後に, 筆者は今回の会議出席にあたって日本鉄鋼協会第7回日向方斉学術振興交付金の援助をいただいたことを付記する。

編集後記

最近の会議で, 論文が査読終了から発行されるまで 6~7 か月の時間が必要な状況にあることが話題になった。論文は著者・校閲者・査読者の間を往復して最終的には和文誌分科会で掲載が決定される。ここまでは読みやすい良い論文となるための必要時間であろうが, ここから先はロスタイムである。年間の全体ページが押さえられ, 特集号の企画も入るから, やむを得ないということになったが, ここでもう 1 度とりあげてみたい。

まず, 本年 2 月と 3 月の会議で掲載決定された論文 19 篇の平均ページ数は 7.8 である。これは現在の投稿規程の「論文は刷り上り 8 ページ以内」がよく守られていることを示す。しかし, 規程が「10 ページ以内」だったころの会誌を調べると, 意外なことに, 1977 年 9 号は平均 8.6, 1980 年 5 号は 8.7 ページとなっている。もちろん, 10 ページの論文も多数見られるが,

平均ページ数は現行規程の 8 ページに近い。投稿規程の 10 ページを 8 ページに変更した時点で大議論が行われたということであつたが, 実際はそれほど無理のない変更であつたことがわかつた。

機械系の学会の投稿規程を調べて見ると, 「論文は 6 ページ以内」が原則であり, 最大 2 ページまでの超過は認めるが, 印刷実費相当の超過料金を徴収することになっている。特に機械学会では論文を A, B にわけて, A 論文は上記のとおりであるが, 速報性を重んじる B 論文は 4 ページ以内を原則とし, 2 ページまでの超過はペナルティを課して認めている。結果は B 論文の数が急増した。

鉄と鋼も掲載所要期間短縮のため, これらの状況を考慮してもよいのではないだろうか。8 ページがどうしても必要な論文は少ないはずである。(T. J.)